紫の上の「若さ」

――遡る少女の美――

毛利香奈子

［キーワード　①源氏物語　②紫の上　③若さ　④成熟　⑤美］

一、はじめに

『源氏物語』における紫の上は、その登場時の鮮烈な印象のままに、天真爛漫で可憐な女君として物語の中に据えられている。しかし、若菜巻以降の紫の上は、気持ちや言葉を抑えることが多く、物語序盤における少女のような描かれ方からは遠ざかっている。紫の上が感情を抑制するに至った最大の要因は、女三の宮の降嫁だと言える。[注1] しかし、源氏の女性関係にまつわる物思いであれば、明石の君や朝顔の姫君の場合に顕著なように、あからさまに嫉妬するのが紫の上の定石であったはずである。それが女三の宮のこととなると、口をつぐみ、目をそらし、それまでとは異なる反応を見せているのだ。若菜巻以降の紫の上の中では、どのような変化が起きているというのだろうか。そしてそれは、どのように彼女の死という終局に繋がっていくのだろうか。本稿では、若菜巻を中心に、『源氏物語』第二部における紫の上について考察していきたい。

二、感情を抑制すること

まず、若菜巻以前、女三の宮の降嫁による物思いをしていない時期の紫の上が、自分以外の女性と源氏の関係について、どのような態度に出ていたかを確認しておきたい。以下、本文の重要な箇所について傍線を付した。

桂の院といふ所にはかにつくろはせたまふと聞くは、そこに据えたまへるにやと思すに心づきなければ、「斧の柄さへあらためたまはむほどや、待ち遠に」と心ゆかぬ御気色なり。

（松風［六］四〇九頁）

（源氏が夜離れの弁明をしたのを受けて）まろがれたる御額髪ひきつくろひたまへど、いよいよ背きてものも聞こえ

たまはず。　（朝顔［八］四八九頁）

これらの明石の君や朝顔の姫君対する態度に代表されるように、嫉妬や不機嫌を隠さないのが紫の上の「定番」の態度であった。そのような態度をとる紫の上に対し、源氏は「いといたく若びたまへる」と評しており、それが紫の上らしさであると認識している。それ故に、女三の宮降嫁の件を打ちあける際も、その嫉妬が表に出てくるのではないか、と源氏は案じている。

はかなき御すさびごとをだに、めざましきものに思して、心やすからぬ御心ざまなれば、いかが思さむと思すに、……　（若菜上［十一］五二頁）

紫の上を試すような揶揄の言葉ではなく、源氏の心内語として叙述されていることが、それがいかに日常茶飯事であったかを表していよう。しかし、源氏の予想を裏切って、紫の上は「いとつれなくて、」といった様子である。それでも源氏は案ずることをやめず、「まだきに騒ぎて、あいなきもの恨みしたまふな」と訓戒するのである。いつもと違う紫の上の反応を、源氏が理解しきれていないために、このようなやりとりになっていると考えられる。その他の若菜巻の場面からも、女三の宮降嫁に対する紫の上の態度を確認していきたい。

今はさりともとのみわが身を思ひあがり、うらなくて過ぐしける世の、人笑へならむことを下には思ひつづけたまへど、いとおいらかにのみもてなしたまへり。　（若菜上［十一］五四頁）

なまはしたなく思さるれど、つれなくのみもてなして、御渡りのほども、もろ心にはかなきこともし出でたまひて、いとらうたげなる御ありさまを……　（若菜上［十三］六三頁）

思ひ定むべき世のありさまにもあらざりければ、今より後もうしろめたくぞ思しなりぬる。さこそつれなく紛らはしたまへど、さぶらふ人々も、…（若菜上［十四］六六頁）

姫宮の御事の後は、何ごとも、いと過ぎぬる方のやうにはあらず、すこし隔つる心添ひて、見知らぬやうにておはす。　（若菜上［十九］七九頁）

いみじく忍び入りたまへる御寝くたれのさまを待ちうけて、女君、さばかりならむ心得たまへれど、おぼめかしくもてなしおはす。　（若菜上［十九］八五頁）

さるべきこと、ことわりとは思ひながら、さればよとのみやすからず思されけれど、なほつれなく同じさまにて過ぐ

したまふ。

（若菜下［十一］一七七頁）

これらのように、女三の宮の降嫁により生まれる苦悩に対し、紫の上は常に気持ちを抑えているように描かれている。「つれなし」「もてなす」といった言葉が多く用いられ、「気にならない振りをしている」ような描かれ方が多いことがわかる。これは、嫉妬の感情を露わにするこれまでの紫の上の態度とは、明らかに違うものである。その一方で、感情を抑制する紫の上の様子を目の当たりにしているはずの源氏は、「人により事にしたがひ、いとよく二筋に心づかひはしたまひけれ」と評価しつつも、「いと気色こそものしたまへ」と、嫉妬の癖に関しては相変わらずだと認識している。つまり、紫の上が敢えて本心を抑えて振舞っているということを、しっかり認めているとは言い難いのである。[注2] 人は成長に伴い、感情を露わにすることを「大人げない振る舞いだ」と抑制され、少なからず本心を隠して社会的生活を送るものである。すると、少女時代から長らく感情を抑えてこなかった紫の上は、いつまでも「子供っぽい」女性であったということになる。それが、若菜巻で女三の宮が源氏に降嫁したことを受けて、急に感情を抑えて「大人っぽい」態度に出始めたのだと考えられる。確認するまでもなく、紫の上は若紫巻の登場時に「幼い」と強烈に印象付けられており、嫉妬の癖も幾度となく発揮している。源氏が、紫の上の密かな感情の抑制に気付かず、相変わらず「子供っぽい」振る舞いをすると思ってしまっていても、仕方のない状況であるとは言えるだろう。

それにしても、なぜ紫の上は女三の宮の降嫁の問題に限って、このような態度に出たのであろうか。確かに女三の宮は皇女であり、紫の上の正妻としての地位を脅かす新たな存在である。しかし、だからといって「子供っぽさ」から「大人っぽさ」へと、方針を急変させる理由には直結しないのではないか。紫の上の態度の変化には、もっと複雑に紫の上自身の問題がかかわっているように思われる。「子供っぽさ」や「幼さ」は、見方を変えれば「若さ」という魅力でもある。次に、紫の上が若菜巻で態度を変化させる以前から持ち合わせている、「若さ」について考察していきたい。

三、「若さ」を保つこと

若菜巻開始時点の紫の上は、三十三歳前後であると考えられる。[注3] 容貌が美しく可愛らしい雰囲気の女性であっても、女性として成熟していると言って差し支えない年齢である。同年代の明石の君や、年下の玉鬘と同じように、「おとなぶ」「ねびる」と評されて良いはずだ。しかし紫の上がそのように形容されるのは、女三の宮と対面する際に用いられる「おとなびたるけはひ」一例のみである。

（紫の上）「いとかたじけなかりし御消息の後は、いかでとのみ思ひはべれど、何ごとにつけても、数ならぬ身なむ口惜しかりける」と、やすらかにおとなびたるけはひにて、

宮にも、御心つきたまふべく、絵などのこと。雛の棄てがたきさま、若やかに聞こえたまへば、げにいと若く心よげなる人かなと、幼き御心地にはうちとけたまへり。

（若菜上［二十］九一頁）

確かに「おとなぶ」という言葉は用いられているものの、あくまでも紫の上が「女三の宮よりは大人であるように振る舞う」ことを意識しているさまが叙述されるだけで、客観的な評価ではない。そして、結局その振る舞いを見た女三の宮は、点線部のように「いと若く」という印象を紫の上に抱くのである。「おとなびたるけはひ」は纏えていないということではないか。そもそも源氏は女三の宮に、「心などはいとよき人なり。まだ若々しくて、御遊びがたきにもつきなからずなむ」と、紫の上を紹介しており、彼の中でも「紫の上＝若い」という認識が念頭にあることがうかがえる。そのような紹介のされ方もまた、女三の宮が紫の上を「若い」人だと見るきっかけになったのだろう。つまり、若菜巻に至ってもなお、紫の上は登場時から変わらずに、「若い」「幼い」女性として、六条院世界で認識されているということになる。紫の上は源氏から長年「若い」と評され、二十歳近くも年下の女三の宮からも「若い」という印象を持たれている。そこまでの「若さ」を保っているのは容易なことではなく、不自然ですらある。紫の上が持ち続ける「若さ」とは一体どんなものなのだろうか。紫の上の「若さ」「幼さ」について、藤井貞和[注4]は「紫の上が、唯一、源氏と添い遂げることのできた幸い人である理由を、彼女の天真らんまんな、純潔無垢な性格に求めるわけで、年齢よりも幼いとは彼女のたぐいまれな美質を意味しているとみなければならない。つまり彼女は年齢にもかかわらず少女であることにかわりない。」としている。川名淳子[注5]も「若紫の君のいわゆる「ねんね」ぶりは、その実年齢及び彼女が置かれた状況からいえば、おくてすぎるきらいがあるのである。しかしそれが源氏だけにとってはこの上ない美質であり、心理的な解放となっていることは重要である。」としている。物語の中に限らず「若さ」とは魅力的なものであるが、源氏が紫の上の「若さ」にそこまで美質を感じる理由を、源氏にとっての「若さ」とは何か、という点からも考えておきたい。

もともと源氏自身も、若々しく輝くような容貌が魅力の主人公として造型されている。その容貌は、物語の中心に在る男君にとって、重要な美質であり、中心である限り衰えないことが望ましい。源氏の場合は、若菜巻の四十の賀の際にもその「若さ」が保たれていることが、玉鬘とのやりとりで強調される。

（源氏は）いと若くきよらにて、かく御賀などいふことは、ひが数へにやとおぼゆるさまの、なまめかしく人の親しげなくおはしますを、めづらしくて、年月隔てて見たてまつりたまふは、いと恥づかしけれど、なほけざやかなる隔てもなくて、御物語聞こえかはしたまふ。

（若菜上［十二］五六頁）

この後、源氏は玉鬘に対して、「過ぐる齢も、みづからの心にはことに思ひとがめられず、ただ昔ながらの若々しきありさまにて、改むることもなきを……」と語っている。玉鬘の子供たちを見て、衰えを感じずにはいられないとも述べているが、「自分としては若いつもり」という意識であることがわかる。もちろん源氏の「若さ」はその容貌に裏打ちされたものでもあるだろうが、ここでは妙齢を過ぎても「若いつもり」でいられる源氏の精神的な「若さ」というものがより重要であろう。「若い」と思い込むには、自身の思い込みに加えて、何らかの外因が必要なはずだ。それが、四十の賀の後に展開される、朧月夜との再会の場面から読み取れるのである。

若菜巻で久しぶりの再会を果たした源氏と朧月夜は、しきりに昔話に花を咲かせ、彼らの様子には「若やかなる心地」「いと若やかなる御ふるまひ」などの言葉が用いられる。この言葉をよすがとして、決して若くはない二人が、若い頃のような逢瀬を再現している。つまり朧月夜と会う源氏は、過去を生きているのだ。一方、普段紫の上と共に過ごす源氏は、「若い」とは形容されず、昔の話ばかりしているわけでもない。朧月夜と源氏が対峙する場面と比較すると、過去は影を潜め、現在進行形の場面になっている。紫の上と対峙している源氏は言葉や昔話に頼らずとも、若々しくいられるということになる。この差を生み出しているものこそ、紫の上の「若さ」だと言い換えられないだろうか。現在進行形で「若い」紫の上と一緒にいる時の源氏はそれだけで「若くいる」ことができ、彼女と永続的な夫婦関係を保っているからこそ、源氏自身の「若さ」も保たれているのだとも考えられる。物語が紫の上の妊娠・出産・出家などを徹底的に回避し、「若さ」を賛美するのは、主人公たる源氏から、その求心力のひとつである「若さ」が失われないようにするためではないか。「若い」紫の上が隣にいれば、昔と今の差は埋まり、源氏はいつまでも「若いつもり」でいられるのだ。[注6] 紫の上は「若さ」を持ち続ける女性であるが故に、源氏に最も愛され、[注7] 六条院の中心たり得たのではないだろうか。

年齢以上に「若い」紫の上の隣に「若い」源氏が並ぶ―若くあり続ける夫婦の姿は、どこか人間味を欠いている。そこで思い出されるのは、少女期の紫の上が二条院で、自分や源氏の人形を作って雛遊びをする場面である。川名淳子[注8]は『『源氏の君』と称した人形を雛の御殿に向かわせる若紫の姿に、幸福な雛遊びの世界を感じさせ、かつそれがまさに二条院における二人の生活によく似た雛型（ミニチュア）であり、相似形であることを示すことにより、源氏と若紫の間が「ごっこ遊び」の延長の、挫折のない関係であることを、見てとれるように仕組まれているのである。」としている。川名の指摘の通り、「若い」夫婦であり続ける源氏と紫の上は、まるで雛屋の中に作られた人形のようである。紫の上は少女時代、源氏と自分の分身を作り、雛屋で夫婦生活を演じていたのだろう。紫の上は、源氏と夫婦になる以前から、無意識のうちに夫婦生活をシミュレーションして、彼に見合った「若い妻」の演技を身につけていたことにな

る。その積み重ねがあるからこそ、紫の上は源氏の傍で、「若い妻」という役を難なくこなし続けることができているのだ。三十歳を過ぎた女性が、「若く」あり続けるためには、素質だけでなく演出や演技が必要なことは想像に難くない。彼女の容貌や源氏との年齢差だけでなく、これまでの経験や、源氏から求められるものなどから、紫の上の「若さ」は形作られているとも言えるのである。紫の上の「若さ」は、天性のものであると同時に、生きる上で身についた技能でもあるのだ。そしてその「若さ」は紫の上の代名詞であり、彼女のアイデンティティであると言ってもよいだろう。

四、「成熟」の模倣と挫折

永続的な「若さ」という美質によって他の女性たちとの差を作り、六条院世界の中心となり得た紫の上。彼女が若菜巻以降、その美質が醸し出す天真爛漫さを抑制し、本心を隠した「おとなびたるけはひ」を纏おうとしている原因は、女三の宮の降嫁にあることは間違いない。ではなぜ「大人っぽく」振舞おうと考えたのか、という疑問が残る。六条院の北の方としての地位を奪われるという危機感や物思いによる変化ならば、もっと別の態度に出てもよかったはずである。その理由を考えるにあたり注目したいのが、紫の上と女三の宮の共通点としての「若さ」「幼さ」である。若菜巻における女三の宮を表す言葉は、「幼し」「小さき」「いはけなし」「何心なし」などであり、それらが少女期の紫の上にも共通して用いられていることは、先行研究でも多く指摘されている。またそれは、女三の宮が紫の上をなぞった人物造型であることを示しているが、そこには決定的な差が存在していることも、指摘されている。[注9] 紫の上の無垢な純粋さに対し、女三の宮は暴力的な無邪気さを備えているとされる。[注10] 本稿では、性質の違いはあれども、二人が共に「若い」「幼い」女君だとされることに注目したい。

女三の宮が降嫁したことにより、これまで六条院世界の中で紫の上ひとりだった「若い」女君は、二人になった。紫の上の専売特許であった「若さ」を持つ者がもう一人現れてしまったのである。紫の上が「若さ」を保ち続けることで、源氏に愛され続け、六条院の中心でいられたことは前述した。その「若さ」が紫の上だけが持つ特別な美質ではなくなる、ということは、つまりは彼女が源氏に最も愛される六条院の中心であることの根拠が揺らぐ、ということだとも考えられるのである。同じ「若さ」を武器に戦うとなれば、他の女君に対抗するように、あからさまに嫉妬することで源氏の心をつなぎとめておくことはできない。朱雀院の皇女という付加価値を持つ女三の宮に、紫の上は敵わない。加えて、同じ「若さ」とはいえ、暴力的なまでの無邪気さを纏う女三の宮には、技能として確立した紫の上の「若さ」は、通用しない。六条院における今の地位を守るためには、新たな武器が必要であることを察知し、紫の上はそれを作り出した。その武器が「おとなびたるけはひ」—感情を抑え、「成熟」した女性らしく振舞う、ということだとは考えられないだろうか。前掲した紫の上と女三の宮の対面場面において

「おとなびたるけはひ」で「若やか」に話す紫の上の様子には、「成熟」を纏った上で「若さ」を出し、女三の宮に合わせることで、優位に立とうとする意識が表れているのではないか。この点について、三村友希[注11]は「大人らしさと子供らしさという演技、二つの仮面を使い分けることが鎧になり、盾になることを、紫の上は学んだのである。」としている。また、この場面についての指摘ではないが、三田村雅子[注12]・石阪晶子[注13]も、少女期の紫の上は藤壺の形代として、少女の身体の中に大人と子供が同居している、という指摘をしている。それを踏まえると、藤壺の影が薄まった若菜巻に至り、再び大人と子供の共存が、今度は紫の上自身によって紫の上の身体の中に作られたということになるだろうか。

少女期は源氏の願望に応じて大人と子供の共存がなされていたのに対し、若菜巻では当の源氏に「おとなびたるけはひ」が理解されていない点も重要だと考えられる。源氏により要請された「成熟」と「若さ」の共存は、「若さ」が前面に出ることで紫の上にとって最大の美質となり、武器となった。しかし、紫の上が苦肉の策として行った「成熟」と「若さ」の共存は、「成熟」を前面に出そうとするも、肝心の源氏にはそれが認識されず、彼女の美質とも武器ともならない。では嫉妬の対象である女三の宮はどう受け止めるのかといえば、前述した通り、「いと若く心よげなる人」という印象しか持たず、紫の上の意図など全く意に介していない。紫の上の新しい武器である「おとなびたるけはひ」は早々に無効化されてしまっている。紫の上にとっては、確かに「大人と子供の使い分け」が武器であったのだろうが、結果的に彼女はその武器を使いこなせていないと考えられる。紫の上は、源氏と女三の宮にとっての「成熟した女君」として六条院の中心に存在することに失敗しているのだ。「成熟」した上で「若く」見せている、という彼女の努力を理解する存在は、六条院の中にはいないのである。しかし、紫の上は「成熟した上での若さ」という努力を諦めてはいない。彼女の「感情を抑制する」ことに代表される「おとなびたるけはひ」は、若菜巻を通じて変わらない。感情を露わにして「成熟」という要素を手放してしまえば、女三の宮との差がなくなってしまうためである。紫の上が、女三の宮とは一線を画する六条院の中心として生きるためには、「自分は成熟している」という差を頼りにするしかない。紫の上はそれに縋ることで、女三の宮に敗北している自分から目を背けることができたのだろう。

紫の上が「成熟」に失敗したのはなぜか、というところに立ち返ってみたい。前述したとおり、「若さ」という美質を求められてきた紫の上は、若菜巻に至り、「感情を抑える」ことをはじめとする「おとなびたるけはひ」を出すことで、急に「成熟」しているかのように振舞う。その「成熟」は、本当の「成熟」なのだろうか。確かに少女期に比べれば、年齢を重ねて自ずと「成熟」している部分もあるだろう。だとしても、急激にそれが表面化するということはあるのだろうか。どこか付け焼き刃のようには思えないか。そもそも紫の上は、「成熟」する

ことを望まれない存在だったのであって、時の流れに沿って徐々に「成熟」を手に入れたとは考えにくい。外部からの影響があったと見るべきではないだろうか。紫の上にとって「成熟」した女君というのは、若菜巻以前においては、源氏の愛を争う嫉妬の対象であり、観察対象であったはずだ。観察することで、「成熟」の正反対にある「若さ」を発揮して、自身の地位を確実なものにしてきたのだ。言い換えれば、紫の上が知っている「成熟」とは、嫉妬の対象として観察してきた女性たちのそれなのではないかということである。源氏から漏れ聞く女君たちの評判、明石の君との対面[注14]など、嫉妬や対抗心を抱いていることも手伝って、紫の上が彼女たちの情報を入手する機会は少なくなかったと考えられる。それを模倣して作り上げたのが、紫の上にとっての「おとなびたるけはひ」であり、「感情を抑える」という行動なのではないか。

少女期から雛遊びで「若い妻」のシミュレーションをしていた紫の上にとって、身近なモデルを観察して作り上げた「成熟」を演じるのは、雛遊びの延長のようなものだったとも考えられる。少女期の雛遊びと異なるのは、「若さ」は求められていたのに対し、「成熟」は誰にも望まれていなかったということである。そのために、紫の上の作り上げる「成熟」は模倣の域を脱することなく、「若さ」に代わる新たなアイデンティティとして確立できなかったのではないか。「若い」ままでは生きられず、かといって「成熟」することもできない。こうして紫の上は、「若さ」と「成熟」の間で、六条院世界における自身のアイデンティティを喪失し、自分を見失っていく。

五、揺れる「若さ」と「成熟」—発病

若菜巻後半に至ると、ついに紫の上は発病する。繰り返しになるが、発病の原因も、女三の宮にまつわる物思いであるとするのが一般的であろう。しかし、考察してきたように、女三の宮降嫁への物思いの裏には、これまで紫の上のアイデンティティだった「若さ」の代わりに、「成熟」を手に入れようとし、挫折するという苦悩も存在している。「若さ」と「成熟」の間で揺れる自己の不安定さに悩む紫の上、という観点から、彼女が発病後に辿った道のりを捉え直していきたい。

これまで特権的な美質として賛美されてきた「若さ」の価値が奪われていく不安と焦り、それを緩和しようと「成熟」を模倣するも上手くいかず、ますます紫の上の心は不安定になっていったはずだ。普段は隠さずにいる自分の気持ちも、「成熟」を模倣するために抑えている。物思いからの解放の手段として出家を望んでも、源氏が首を縦に振らない。さらに、「若さ」とは正反対の「おとなびたるけはひ」を演じ、その間をさまようことで、これまで経験したことのないストレスも感じていたのではないか。自分は「若い」のか、それとも「成熟」しているのか—紫の上ははじめて自分というものに対峙したに違いない。積み重なった物思いが、病およびもののけとして表に出てきたことで、紫の上は発病したのではないだろうか。若菜巻後半、一度紫の上が息を引き取る場面では、調伏された六条御息

所がもののけとして発言するが、紫の上の心情と重なる部分がないわけでもない。例えば、「わが身こそあらぬさまなれそれながらそらおぼれする君は君なり。いとつらし、つらし」と泣き叫ぶ箇所などは、「若さ」というアイデンティティだけを守って生きていればよかった紫の上が、急ごしらえの「成熟」を演じなければならなくなった自身の変化を嘆き、それに気付かない源氏を責める気持ちに、同調する部分がないだろうか。紫の上自身が抑制してきた本当の感情が、六条御息所の形を借りて具現化した可能性も捨てきれない。いずれにしても、これまで源氏とその周囲の女性たちばかり見つめて苦悩していた紫の上のまなざしは、図らずも女三の宮降嫁に伴う物思いの中で、ようやく自分自身に向けられたということになるだろう。自己を見つめ、自己に迷う物思いが、紫の上発病の引き金を引いた要因のひとつだったのである。

発病の後、紫の上は臨死を経て蘇生する。一度息を引き取った紫の上が蘇生した、ということを描くだけでなく、「紫の上が死去した」という噂が広まり弔問客が来てしまうところまで描かれている。この出来事は、紫の上が身体的な意味だけでなく、社会的な意味も含めて一度死去し、生き返ったということを示しているのではないだろうか。源氏から「若さ」を求められ、生きるために「成熟」が必要とされるという、二つの呪縛から逃れ、新たな紫の上として解き放たれる千載一遇の機会であったとも考えられる。そして蘇生後の紫の上は、「御髪おろしてむと切に思したれば」と、源氏に出家の希望を伝えている。出家することで、「若さ」と「成熟」の二律背反から脱却し、別のアイデンティティを獲得できるかに思われた。しかし、紫の上が不幸だったのは、蘇生した場所が二条院だったということである。二条院といえば、紫の上が北山から引き取られてきた場所であり、六条院よりも長い期間住んだ邸である。[注15] 紫の上が、源氏にとっての藤壺の形代として、また、「若さ」を保つ妻として成長した二条院は、いわば第二の子宮のような場所だと言えよう。しかも、須磨退去の約二年半を除いて、ほぼずっと源氏と共に二条院で過ごしたのである。源氏と紫の上の関係の深さや濃さが、強烈に刻まれた空間ということになる。そこで蘇生するということは、一度死してもなお源氏とのつながりは断ち切れない、ということではないか。紫の上蘇生後の源氏は、「人わるく御かたはらに添ひゐたまひて」と、それまで以上に彼女の側を離れようとしない。源氏の理想に合わせて育てられた紫の上は、また源氏との絆（ほだし）に引きずられることになる。望んだ出家が、「御しるしばかりはさみて、五戒ばかり受けさせたてまつりたまふ」と、不完全な形で為されたのも、その影響だろう。他の女性の影がちらつき、源氏が紫の上のそばから離れる可能性がある六条院で蘇生すれば、違った展開が見込めたとも考えられる。紫の上にとって二条院に移されたことは、女三の宮から源氏の心身を引き離したが、彼女が目指す「成熟」や「新しい自分」からも、彼女自身をさらに引き離してしまったのだ。

六、自己の奪還と死―時を遡る紫の上の「から」

紫の上は蘇生と同時に新たな自己を獲得することに失敗し、もちろん本当の「成熟」を得られるはずもなく、源氏が求める「若さ」を保つ人形のような女君として、この世にとどまることになった。臨死・蘇生・出家を経てもなお、源氏は紫の上に「成熟」を認めず、理想の「若さ」を幻視し続ける。それに反して、紫の上は全てを諦めたかのように、生きながらえることをますます望まなくなっていく。「消えとまるほどやは経べきたまさかに蓮の露のかかるばかりを」の和歌や、「いとかりそめに世を思ひたまへる気色」などに、その心の内が透けて見える。二条院で蘇生したことにより、源氏の傍で彼の理想の妻として生きる以上、「若さ」と「成熟」の呪縛からは逃れられないと悟ったのだろうか。蘇生後の紫の上は、物思いをしつつも、どこか達観したように見える。

紫の上蘇生後は、柏木と女三の宮の問題が浮上し、続いて夕霧と女二宮の結婚問題へと話題が移行していく。二条院に留め置かれる紫の上の叙述は減り、蘇生後の紫の上の様子が詳細に語られるのは、御法巻まで待たなければならない。その間に、紫の上の身体と心にどのような変化があったかは、明らかでない部分が多い。その空白を、紫の上の最期の場面から検討し、「若さ」と「成熟」に翻弄された紫の上が辿り着いた先を考察してみたい。二条院で死を迎えた紫の上の様子は、夕霧のまなざしから以下のように叙述される。

御髪のただうちやられたまへるほど、こちたくけうらにて、つゆばかり乱れたるけしきもなう、つやつやとうつくしげなるさまぞ限りなき。灯のいと明かきに、御色はいと白く光るやうにて、とかくうち紛らはすことありし現の御もてなしよりも、言ふかひなきさまに何心なくて臥したまへる御ありさまの、飽かぬところなしと言はんもさらなりや。なのめにだにあらず、たぐひなきを見たてまつるに、死に入る魂のやがてこの御骸にとまらなむと思ほゆるも、わりなきことなりや。（御法巻［八］五〇九頁）

特に傍線部分以降については、夕霧の所感という枠を超えて描かれているようにも読み取れる。夕霧が紫の上を垣間見たのは野分巻の一回であったはずであり、その際は、「うち紛らはすことありし」様子ではなかっただろう。彼女が取り繕って振る舞う様子は、若菜巻以降に顕著なのであり、夕霧はそれを知らないはずだ。ということは、死去直後の紫の上の様子は、夕霧のまなざしで語られていながらも、紫の上の人生の総括として叙述されているのだと考えたい。

傍線部では続いて「何心なくて臥したまへる御ありさま」が賛美されている。「何心なく」は紫の上の少女期に頻繁に用いられた表現であり、彼女の「若さ」「幼さ」を象徴する言葉である。[注16] つまり、死去した紫の上は、少女期のような「若さ」を取り戻しており、それはこれまでのどの時期の紫の上よりも美

しいということだ。このことから推察するに、蘇生後の紫の上は二条院という空間の中で、ひたすら時間を逆行するように過ごしていたのではないか。[注17] 源氏という絆（ほだし）から逃れられない二条院の中で、「成熟」という道を絶たれた紫の上は、「おとなびたるけはひ」を捨て、「成熟」を模倣することをやめたはずである。二条院には女三の宮も、かつて観察対象とした明石の君もいない。蘇るのは源氏と二人きりだった時間であり、その当時の彼女は「幼く」「若い」少女だった。そのまま、紫の上はさらに時間を遡り、源氏に見出されるよりも前、北山で本当の少女であった頃に戻ったのだろう。何のしがらみも物思いも無い、他人からの理想を押し付けられることもない、無邪気で自由な少女に戻っていったのではないだろうか。最期の姿に、源氏のもとで生きていた時以上の魅力があり、最も美しかったのはそのためなのだ。[注18]

紫の上はその生涯の最期に、女三の宮にも、源氏にも、誰にも干渉されない、自分だけの少女の輝きを奪還した。時を遡って取り戻したその美しさこそが、紛れもないありのままの「紫の上」という自己だったのである。自分を取り戻した紫の上の魂は、北山で自由を得たあの雀の子のように、空へ飛翔したことだろう。だからこそ、残された身体は「から」[注19]なのである。

七、おわりに

ついに紫の上は、その最期まで「成熟」することはなく、「成熟」を模倣し、挫折したに過ぎなかったというのが本稿での見解である。そもそも彼女のアイデンティティは少女期の無垢なる姿にあるのであって、「成熟」してはならない存在だった。そして、紫の上の「若さ」が保たれることは、源氏に「若さ」という輝きを与え続けることにつながるのであり、この物語が源氏を主人公としたものであるためにも、紫の上の「成熟」はやはり回避されなくてはならなかったのではないか。若菜巻では、「若さ」と「成熟」の間をさまよい、自身の生き方に迷うかのようだった紫の上。皮肉なことに、彼女はその死をもって、誰にも似ない、誰にも縛られない少女の自分を取り戻した。そして、時を遡る少女の輝きによって、六条院世界における紫の上の地位と価値を、永遠のものとしたのだ。

注

1　女三の宮降嫁問題にまつわる紫の上の苦悩については、多くの先行研究がある。小町谷照彦「紫の上の苦悩―紫の上論(3)」（『講座源氏物語の世界　第六集』・有斐閣・一九八一年十二月）・関根慶子「「若菜」より「御法」にいたる紫上」（『源氏物語の探求第八輯』・風間書房・一九八三年六月）・後藤祥子「「若菜」以後の紫の上」（『源氏物語の史的空間』・東京大学出版会・一九八六年二月）など。

2　伊井春樹「紫上の悔恨と死―二条院から六条院へ、そして二条院へ―」（『源氏物語の視界3』・新典社・一九九六年四月）では、紫の上の「おいらか」な態度が外面で

あることを見破れない源氏は、紫の上の虚像を美化していくと指摘している。紫の上の真意を理解できないという点では、本稿と共通している。

3 若菜下（若菜上開始から約五年経過）に「（紫の上は）今年三十七にぞなりたまふ。」と明記されている箇所がある。源氏との年齢差が八歳だと考えると紫の上は三十九歳のはずであるが、重厄であることを優先した意識的な誤りとも考えられる。本稿では間をとり、若菜上開始時は三十三歳前後であるとした。

4 藤井貞和「少女と結婚」（『物語の結婚』・創樹社・一九八五年七月）

5 川名淳子「若紫の君―絵と雛遊びに興ずる少女―」（『人物で読む『源氏物語』』第六巻・勉誠出版・二〇〇五年六月）

6 若菜巻における源氏と紫の上「昔」と「今」については、横井孝「光源氏の「昔」・紫の上の「今」」（『源氏物語の視界3』・新典社・一九九六年四月）でも言及されており、言葉少なになった紫の上は心理的に成長し「今」を生きるようになったという指摘がある。確かに紫の上にとってはそうだが、本稿では源氏は紫の上の「今」について理解できていないと考え、源氏にとっての「昔」を「今」にする役割として紫の上が認識されていると捉えた。

7 小嶋菜温子「「世づかぬ」女君たち―葵上・紫上・末摘花の性と〈産む性〉」（『源氏物語の性と生誕―王朝文化史論』・有斐閣・二〇〇四年三月）では、紫の上の少女の身体に微妙なエロスが付帯されることで、紫の上が「世づく人」になっていくことが指摘されている。本稿とは視点が異なるが、源氏が紫の上の少女性や幼さという魅力に執着していることを示唆しているものと考えたい。

8 前掲（注5）論文

9 池田節子「女三の宮造型の諸問題―紫の上と比較して―」（『源氏物語表現論』・風間書房・二〇〇〇年十二月）、三村友希「女三の宮の〈幼さ〉―小柄な女の幼稚性―」（『姫君たちの源氏物語―二人の紫の上―』・翰林書房・二〇〇八年十月）

10 原岡文子「紫の上の登場―少女の身体を担って―」（『源氏物語の人物と表現　その両義的展開』・翰林書房・二〇〇三年五月）、三田村雅子「源氏物語のジェンダー―『何心なし』『うらなし』の裏側」（『解釈と鑑賞』第六十五巻第十二号、至文堂、二〇〇二年十二月）

11 三村友希「紫の上物語の生成―紫のゆかりの糸を手繰って」（『人物で読む『源氏物語』』第六巻・勉誠出版・二〇〇五年六月）

12 三田村雅子「若紫垣間見再読―だれかに似た人―」（『源氏研究』第8号・翰林書房・二〇〇三年四月）

13 石阪晶子「藤壺の反照―垣間見の発動力―」（『源氏物語における思惟と身体』・翰林書房・二〇〇四年三月）

14 藤裏葉巻における明石中宮入内直後の対面で、紫の上は「ものなどうち言ひたるけはひなど、むべこそはとめざましう見たまふ。」と明石の君の様子に感心している。

15 藤本勝義「幻巻の舞台をめぐって―喪家・二条院」（『源氏物語　鑑賞と基礎知識　No.19 御法・幻』・至文堂・二〇〇一年十一月）では、「紫の上の生涯において、通算で二条院に約二十年、六条院に十五年弱居住したことになる。より長い二条院では、しかも、須磨退去の一時期を除いてほとんどを、常に光源氏と共に住んでいたのである。六条院での大半は、特に正妻・女三の宮に気を使いながらの鬱屈した日々であった。二条院は、紫の上がそこで死ぬのにふさわしい邸であったといえよう。」としている。加えて本稿では、紫の上が少女期を過ごした邸であるという点に注目した。

16 前掲（注10）原岡論文では、「何心なし」は紫の上に十一例、女三の宮に九例用いられており、いずれもほぼ生涯にわたってこの語が繰り返される、と分析されている。ただし、物語後半よりも少女期の用例が多いことから、本稿では少女期および彼女たちの「若さ」や「幼さ」を象徴するものと捉えた。

17 藤井貞和「光源氏物語主題論」（『源氏物語の始原と現在定本』・冬樹社・一九八〇年五月）では、「何心なし」と応じる紫の上の遺骸の様子は「物語のなかのほとんど唯一の救済となっている」という指摘があり、前掲の原岡論文（注15）でも、「秩序に組み込まれることのない無垢を湛える少女の救済」とされている。本稿では「救済」という解釈はしなかったが、自己を奪還し自由を得るという意味では救済と同義とも思われる。また、前掲の伊井論文（注2）では、同じく二条院で死去した桐壺更衣へ運命が回帰しているという指摘がある。

18 神田龍身「源氏物語「北山での垣間見」―〈幼さ〉の射程―」（『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ　古典編1』・右文書院・二〇〇三年一月）にも、北山での紫の上の様子は彼女の人生の中でもっとも輝き、魅力的であったという指摘がある。またそれに惹きつけられる源氏により、少女の魅力は押し殺されるとしている点は、本稿にもつながる指摘である。

19 御法巻では紫の上の遺骸に「骸（から）」が二例用いられているが、若菜巻で一度息を引き取った直後も、「もぬけたる虫の殻などのやうに」と形容されている。

付記

『源氏物語』の本文引用は「新編日本古典文学全集」（小学館）に拠り、適宜『源氏物語大成』にて異同を確認し、表記を改め、区分・頁数を併記した。

（もうり・かなこ　博士後期課程）